

氏名	MICHEL, Wolfgang
学位	博士
専門分野の名称	文化科学
学位授与番号	博乙第 4303 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則(文部省令)第 4 条第 2 項該当)
学位論文題目	カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科の誕生について ー南蛮人の医学から紅毛人の医学へー
学位論文審査委員	主査・教授 高橋 輝和 教授 倉地 克直 教授 永田 諒一 教授 江代 修 順天堂大学医学部特任教授 酒井 シヅ

## 学位論文内容の要旨

本学位論文は提出者が20数年にわたって行ってきた研究の総纏めであり、既に公表されたその成果の一部によって日本医史学会学術奨励賞(1996年)とドイツ連邦共和国功労十字勲章(2004年)を受けている。本論文の要旨は以下の通りである。

従来は江戸中・後期の18・19世紀における西洋医学の受容が積極的に研究されてきたが、16・17世紀に着目する研究者は少なかった。これまでの研究は、初期の受容過程を南蛮流外科と紅毛流外科(阿蘭陀流外科)という視点から整理してはいるものの、前者の実像及び後者の隆盛やその内容について十分に理解されているとは言い難いものであった。本論文は1649年から1651年にかけて、日本での医療活動を通じて幕府関係者の強い関心呼び起こした出島蘭館医カスパル・シャムベルゲル(Caspar Schamberger, 1623-1706年)を中心に、16・17世紀の日本における西洋医学をめぐる動きとその継続的受容の始まりの解明を目的とするものである。

まず、ドイツ・ライプツィヒにおけるシャムベルゲルの青少年時代、そこでの外科医ギルドでの職業訓練、30年戦争中の修行の旅、東インド会社による採用試験、採用後の活動などを明らかにし、日本で出島蘭館医として果たした業績についての理解と評価のための基盤を整える。これは、17世紀に来日したギルド出身の外科医としては初めての事例である。

続いて、シャムベルゲルが伝えた医学・医術及びその受容の特徴を確定するため、1640年代後半までの日本における西洋医学の浸透について考察する。1549年以降のイエズス会による医療活動の特異性を確認した上で、短命に終わった豊後の府内病院の破壊以後、キリシタン弾圧により南蛮人の医術が断片的にしか広まらなかったことを関連資料により解明する。いわゆる南蛮流外科と、当時台頭しつつあった金瘡医学との境目は曖昧であり、南蛮流外科の代表作とされている版本に見られる南蛮系の記述は補助的なものに過ぎず、先行研究が唱えている南蛮

流外科は内容的に明白で独立したものとして確認できない。また、この文脈で取り上げられている沢野忠庵や栗崎道喜についても様々の問題があることを明らかにし、当時の外科術は上記のいずれの流派においても、和・漢・欧の折衷的産物だったことを裏付ける。

1609年以降に来日したオランダ東インド会社の外科医達は多少は注目されていたものの、1641年に蘭館医ポストが設置されて、ようやく安定的な日欧医学交流が行われるようになった。同時に、南蛮人を追放した幕府が一連の品々に関する輸入依存を認識し、以前より紅毛人の科学技術に目を向けるようになっていく。

シャムベルゲルの日本滞在は、それまでの蘭館医達と大きく異なるものであった。彼は日蘭関係の修復のために派遣された特使フリジウスと共に江戸へ赴き、まもなく西洋の有用なものに強い関心を寄せる大目付井上筑後守政重の目に留まった。医薬品の説明や幕府関係者の治療が高評を得たので、シャムベルゲルは幕府の要請により江戸に残り、幕末まで他に類を見ない10か月間にもわたる医療活動と教授を続けた。彼の医術が社会の上層部から受け入れられたことは、その後の普及と歴代蘭館医に対する継続的関心に繋がる重要な要因であった。1650年以降かつてない内容で継続的に幕府関係者から出された注文（医薬品、医書、医療器具など）は、シャムベルゲルの影響の大きさを物語っている。また、通詞猪俣伝兵衛が大目付や長崎奉行のために纏めた報告書はシャムベルゲルを元祖とする流派の原点となった。

このような背景の下で現存の写本資料を通じてシャムベルゲルの教授やそれを受けたとされる人物及び初期写本の流布を解明する。ここではとりわけ医師河口良庵の功績が際立っている。続いてこれらの資料の比較に基づき慶安3・4年（1650・51年）の報告書の再構築を行い、その内容とヨーロッパの書物との関係について分析する。ライプツィヒの資料及びオランダ東インド会社のために出版されたヘルルス著『外科学の試験』で確認できるように、シャムベルゲルが日本で紹介したのはヨーロッパのギルド外科医用の小外科学であった。それはドイツ流やオランダ流のものだけではなく、伝統的病理学、中世から伝わり改善された膏薬、近世外科学の巨匠パレの治療法を取り入れた傷の手当て、しっかりした解剖学などである。しかし日本のカスパー流文書はその一部しか反映していない。ここには通訳上の問題や医療思想の違いの影響があったと思われるが、紅毛流医学の受容は身分の高い患者の要請により始まったので、短期間での治療技術の取得が最優先課題だったのである。

日葡交流時代と違い、医療制度を運営する大きな組織が定期的に日本に蘭館医を送り込んだので、シャムベルゲルの離日後も西洋外科学の受容は続いていった。主導権を握ったのは常に日本側であったが、医薬品などの注文や蘭館医による治療や教授の要請を受けたオランダ東インド会社も日蘭関係及び貿易の改善を念頭に前向きに対応している。またカスパー流文書に見られる医学・医術は西洋の小外科学の範囲内だったが、日葡交流時代から残っている資料とは対照的にヨーロッパのはっきりしたパラダイムに基づいた、より体系的かつ総合的なものである。その内容は、早くも権力者の影響圏を超え、版本として広く一般に知られるようになった。17世紀半ばの出会いとそこから生まれた継続的な医学交流はやがて18世紀の蘭学に繋がっていくが、それは日本の近代化にとって極めて重要な出来事であった。

## 学位論文審査結果の要旨

ミヒェル氏提出の学位請求論文の審査会は、学内委員 4 名（各自の専門は日欧文化交流史、日本近世史、ヨーロッパ中近世史、ヨーロッパ・メディア史）と日本医史学を専門とする学外委員の出席によって 2009 年 2 月 5 日に開催された。

最初にミヒェル氏から本論文の要旨が説明された後に、審査委員との間で質疑・応答が交わされた。その後、審査委員 5 名によって慎重に審査が行われ、その過程で以下のような点について高い評価が出された。

1. 出島蘭館日誌を初めとする関連海外資料を豊かな語学力でもって飽くことなく追求した成果は先行研究をはるかに凌駕するものであり、従来の定説を改め、あるいは定説に疑問を投げかける結果となっている。
2. ミヒェル氏がヨーロッパや日本で発揮した文献博搜力は真に驚異的であり、日本語古文書の読解力でも日本人研究者に全く引けを取らない。
3. カスパル流外科の開祖とされるカスパル・シャムベルゲルの出自や経歴はこれまで全く不明であったが、17 世紀ドイツの出版書の中に見つけた短い注釈を手掛かりにしてシャムベルゲルがドイツ・ライプツィヒの出身者であることを突き止め、各種の公文書によって彼とその家族の経歴を初めて明らかにした。
4. シャムベルゲルの葬儀の際に読み上げられた伝記の発掘によって、彼の生涯を明らかにし、また彼の肖像画も発見した。
5. オランダ東インド会社が外科医を採用する際の間答書『外科学の試験』を発掘して、シャムベルゲルが日本に持ち込んだ外科学の技術水準を確認し、蘭館医達のレベルが、従来言われていたような、にせ医者まがいのものではなかったことを検証した。
6. カスパル流外科の処方箋からシャムベルゲルが利用した薬局方はアムステルダム薬局方の 1636・39 年版と一致する点の多いことを指摘した。
7. 蘭館日誌に基づき、高級武士が積極的に求めた西洋医学の知識、薬物、医療器具について詳しく検証した。
8. カスパル流外科書を検討して、その初期の成立とそれに関わった人物について正当な評価を与えた。
9. カスパル流外科が一部の者（高級武士）のものであったという定説をカスパル流外科書の流布から否定した。
10. 儒医向井元升についてシャムベルゲルとの関係を蘭館日誌から明らかにし、さらにドイツ人蘭館医ハンス・ユリアン・ハンケの業績も明らかにした。
11. 内容の検討によって、従来は紅毛流外科と言われていたものが南蛮流外科であり、また逆に南蛮流外科と言われていたものが紅毛流外科であったことも明らかにした。
12. 金瘡と南蛮流外科との関係に注目し、両者が関連すること、金瘡医山本玄仙の『万外集要』（1619 年）は和・漢・南蛮の折衷的なものであったことを明らかにした。
13. 南蛮流外科はキリスト教禁止後も存続して、長崎歴史文化博物館蔵の『外科之書』（1664 年）が最後のものであったことを明らかにした。
14. 17 世紀中葉のカスパル流外科の受容は、18 世紀後半から始まる蘭学の隆盛に繋がる重要な出来事であって、それを過小評価する杉田玄白『蘭学事始』の歴史認識は間違い

であることを指摘した。

以上のような肯定的な評価に対して若干の否定的な評価や説明・考察不足の指摘もあった。

1. 意味の不明な表現が少し見られる。
2. 表現の不統一が少し見られる。
3. Schamberger ではなくて、当時の文献にしばしば Schamberg と印刷されていることの説明がない。
4. 「ハルスランド」のハルスをオランダ語の hart ではなく、ドイツ語の Herz と解することには無理がある。
5. カスパル流外科の伝播は一樣ではないので、時代別の性格づけを行うべきではないか。
6. カスパル流外科の標榜は単なる権威づけを目的としている場合もあったのではないか。

しかしながら審査委員会は、上記のような否定的な評価や説明・考察不足は本論文の本質的な価値を決して損なうものではなく、本論文が蘭医学史の研究に大いに寄与するものであると判断し、当研究科申し合わせの「博士論文の審査基準」に合致することを確認して、「博士（文化科学）」の学位を認定するに値するとの合意に達した。